



**Data**

監督：ショーン・エリス

出演：キリアン・マーフィ／ジェイ  
ミー・ドーナ／シャルロット・ルボン／アンナ・ガイス  
レロヴァー／ハリー・ロイド  
／トビー・ジョーンズ／マル  
チン・ドロチンスキー／アレ  
ナ・ミフロヴァー／ビル・ミ  
ルナー

## 👁️👁️ みどころ

近時多くの「ヒトラーもの」が公開され、「アイヒマンもの」も多いが、「ハイドリヒもの」は珍しい。また、フランス、オランダ、ポーランドを舞台とした「ナチスもの」は多いが、「チェコもの」「プラハもの」も珍しい。

当時ボヘミア・モラヴィア保護領だったチェコの提督代理として赴任した「ナチスのナンバー3」ハイドリヒの暗殺は大仕事。韓国映画『暗殺』（16年）は多少マンガチックなところもあったが、本作は終始緊迫間でいっぱいだ。

銃の故障のため暗殺は失敗！一瞬そう思ったが、さて・・・？しかし、結果オーライになれば、その報復は・・・？現場の悲劇と、彼らの犠牲によるチェコ亡命政府の地位の向上。そんな現実を、本作でしっかり勉強したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■公開相次ぐ「ヒトラーもの」だが、この男は初登場！？■

本作は去る7月11日に観た『ヒトラーへの285枚の葉書』（16年）に続く「ヒトラーもの」だが、「金髪の野獣」と称されたラインハルト・ハイドリヒとは一体何者？数多い「ヒトラーもの」映画の中でも、近時は『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマルーム32』215頁参照）以降、『アイヒマン・ショー 歴史を映した男たち』（15年）（『シネマルーム38』150頁参照）の「アイヒマンもの」が目立っている。

『シネマルーム32』216頁では、ナチス・ドイツを率いたアドルフ・ヒトラーに忠誠を誓い、反ユダヤ主義を貫いた極悪非道の「三悪人」として、①ヨーゼフ・ケッペルス、②ハインリヒ・ヒムラー、③アドルフ・アイヒマンを挙げた。しかし本作によると、ヒトラー、ヒムラーに次ぐ「ナチス第3の男」は、「金髪の野獣」と呼ばれた男ラインハルト・

ハイドリヒらしい。最近公開が相次ぐ「ヒトラーもの」だが、この男は初登場！？

## ■□■ナチス・ドイツの侵攻はあちこちに！■□■

近々公開されるクリストファー・ノーラン監督の『ダンケルク』（17年）では、ドイツの陸、海、空軍からダンケルクに追い詰められたフランス軍のイギリスへの脱出作戦が描かれている。この脱出作戦の成功にもかかわらず、1940年6月にナチス・ドイツに占領されたフランスでは、ペタン元帥を首相とするヴィシー（傀儡）政権が登場し、親ナチス政策をとったこと、そして、ある意味で人権の国フランスの「恥部」とも言える「ヴェル・ディブ事件」が1942年に起きたことを『黄色い星の子供たち』（10年）で学ぶことができた（『シネマルーム27』118頁参照）。また、ナチス・ドイツに占領されたオランダにおけるレジスタンスたちの活動は、『ブラックブック』（06年）で学ぶことができた（『シネマルーム14』140頁参照）。

逆に、ナチス・ドイツの支配が及んだデンマークでは、ナチス・ドイツの敗北後、デンマークに残されたドイツの少年兵たちが強制的に地雷除去作業に従事させられたことを、『ヒトラーの忘れもの』（15年）で学ぶことができた（『シネマルーム39』88頁参照）。また、ナチス・ドイツとソ連の勢力がぶつかり合ったポーランドでは、7月2日に観た『残像』（16年）が遺作となったポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』（07年）（『シネマルーム24』44頁参照）で「カティンの森虐殺事件の悲劇」を学ぶことができた。

## ■□■プラハを舞台とした「ヒトラーもの」ははじめて！？■□■

このように、ナチス・ドイツの侵略は各方面に及んでいたが、1947年当時、「ボヘミア・モラヴィア保護領」と呼ばれていたチェコスロバキアのチェコ部分はナチス・ドイツに占領され、チェコスロバキアの亡命政府はイギリスに樹立されていたらしい。この「ボヘミア・モラヴィア保護領」の総督として赴任してきたのが、ナチ親衛隊（SS）の大將にして秘密警察などのナチ弾圧組織を束ねた男ラインハルト・ハイドリヒだ。なるほど、なるほど・・・。

プレスシートにある増田好純氏（ドイツ現代史研究者・早稲田大学）の①「ハイドリヒに挑んだ男たち—大義と情動のはざまで」、②「ハイドリヒとは何者か」を読めばボヘミア・モラヴィア保護領の成立事情とその中で戦ったレジスタンスの大変さがよくわかるので、これは必読だ。韓国映画『暗殺』（15年）は、日本の占領統治時代の韓国を舞台に、初代の朝鮮総督として京城（現在のソウル）に乗り込んできた寺内正毅の暗殺を狙う物語だった（『シネマルーム38』176頁参照）が、本作は邦題の通り、そんな男ハイドリヒの暗殺を狙う物語だ。私の持論の1つは映画は勉強。しかし、あなたは本作からいかなる勉強を・・・？

もつとも、ハイドリヒ暗殺の物語は既にフリッツ・ラング監督の『死刑執行人もまた死す』（43年）やルイス・ギルバート監督の『暁の7人』（75年）でも描かれていたらしい。私は自分の無知を告白するとともに、その分しっかり本作を勉強したい。

## ■□■誰が味方で誰が敵？こいつは本物？それとも・・・？■□■

本作の時代は1941年冬。ちなみに、この年の12月8日に日本はアメリカの真珠湾に奇襲攻撃を仕掛け、日米戦争が始まっている。そして、舞台はボヘミア・モラヴィア保護領のチェコだ。

イギリス政府とチェコ亡命政府からハイドリヒ暗殺の指令を受けて、パラシュートで森の中に降り立ったのはヨゼフ（キリアン・マーフィ）とヤン（ジェイミー・ドーナ）。彼らの最初の任務は、現地のレジスタンス組織と接触し、その支援を受けること。しかし、総督としてボヘミア・モラヴィア保護領を統治しているハイドリヒは、既に莫大な報奨金を出すことによってほとんどの抵抗組織を潰していたから、ヨゼフとヤンの2人は、接触する男たちをすべて信用することができず、誰が敵で誰が味方かを見分けることが不可欠だった。また、仲間と一緒にハイドリヒを暗殺する「エンストラポイド作戦」を開始しても、その作戦への賛否をめぐる意見対立があれば、いつ誰が裏切るかもしれないから、こいつは本物？それとも・・・？の判断が不可欠だ。

本作導入部では、①動物病院の獣医、②現地の抵抗組織「インドラ」の幹部であるヴァネック（マルチン・ドロチンスキー）とハイスキー（トビー・ジョーンズ）、③2人の隠れ家となるモラヴェツ家の主人、妻マリー・モラヴェツ（アレナ・ミフロヴァー）、バイオリニストの一人息子アタ・モラヴェツ（ビル・ミルナー）、④モラヴェツ家にお手伝いとして来ている可憐な娘マリー・コヴァルニコヴァー（シャルロット・ルボン）等が登場するが、ヨゼフとヤンにとって誰が味方で、誰が敵？そしてまた、こいつは本物？それとも・・・？

## ■□■女は道具？それもやむなし！他方で真実の愛も！■□■

敵と味方、本物とニセ物の判断を誤れば、ヨゼフとヤンも「エンストラポイド作戦」の実行前に捕えられてしまうことになる。そんな緊迫感の中で、ヨゼフはマリーに「同じような年頃の女性はいないか」と尋ねたが、それは一体何のため？それは明らかにその女を道具に使うためだ。翌日、マリーの紹介で現れたのはレンカ（アンナ・ガイスレロヴァー）という美しい女性だったが、これは美人すぎるのが少し難。だってあえてアベックで行動して目立たないようにするべく女を道具としたのに、こんな美人では逆にドイツ兵の注目を集めてしまうから、これではヤブ蛇・・・？

緊迫した動きの中でも、本作はそんな面白いエピソード（？）が描かれるが、正直言って、私にはヨゼフの女を道具として利用する気持ち（戦術）は理解できるが、マリーと恋に落ち、アタの誕生日パーティーで婚約発表までするヤンの気持ちは理解できない。余分

なことに気を遣わず(?)、任務に集中した方が自分も気が楽なのでは・・・?

ちなみに、司馬遼太郎の『坂の上の雲』では、主人公の1人である秋山真之は、宮内省御用掛、稲生真履の三女である季子と結婚はしたものの色恋ざたにはほど遠かったが、海軍兵学校同期の親友・広瀬武夫は、駐在武官としてロシアに駐在中、美しいロシア娘・アリアズナ・アナトーリエヴナ・コワリスカヤと恋に落ち、国際結婚問題にまで発展したが、それによる気苦労も大きかったはずだ。それはともかく、本作では、こんな緊迫した状況下で生まれる真実の愛の姿にも注目したい。

## ■□■決行！それとも中止？命令はシンプルでなくちゃ！■□■

野球でもベンチからの指示は、勝負なら勝負、敬遠なら敬遠とシンプルでなければダメ。バッターの様子を見ながら、勝負か敬遠かお前がしっかり決めて投げる、などというピッチャーへの指示はナンセンスだ。それと同じように連絡網が不十分な状況下でハイドリヒ「転勤」の噂が出る中、エンストラポイド作戦を決行するの？それとも中止するの？本作を見てみると、イギリス政府とチョコスロバキア亡命政府からの指示は2通りに分かっていたから、こりゃナンセンス。これでは現場が混乱するのも当然だ。しかも、「インドラ」の幹部であるヴァネックはもともとハイドリヒ暗殺作戦を決行すれば、その報復でチョコのレジスタンス組織は壊滅させられると考えて作戦に反対していたから、作戦中止の手紙が届くとそれに同調し、作戦決行の手紙に正当性を認めなかったのは当然。

そんな混乱下、ヨゼフが「ハイドリヒ転勤前の明日に作戦を断固決行！」という強い意志を示したため、全体の意見は「決行に決定!」。しかし、そこでヤンは極度の緊張感のため過呼吸症状を引き起こす始末だったから、こりゃホントに大丈夫?もつとも、ハイドリヒ暗殺作戦の実行計画は単純なものだったから、スクリーン上でその展開を見てみると、まさに計画通り。ここで、ヨゼフの拳銃から弾丸が発射されれば暗殺は大成功!ところが、何とヨゼフの拳銃の故障のため弾丸が出なかったから、アレレ・・・?そこでヤンがハイドリヒめがけて投げた手榴弾によってハイドリヒの車は大破したが、さてハイドリヒの生死は・・・?

そんな状況下、ヨゼフとヤンは仲間とともに現場から逃走したが、直ちにプラハに非常事態宣言が出され、街は完全に封鎖されてしまったから、ヨゼフとヤンをはじめレジスタンス仲間たちの運命は・・・?

## ■□■民間人の悲劇をどう考える?■□■

本作は、韓国映画『暗殺』と同じように、①暗殺側の人間である実行犯のヨゼフとヤン②それを支援する抵抗組織インドラの幹部であるヴァネックとハイスキー③報奨金には目もくれず危険も省みないで、抵抗組織を秘かに支援する民間人のモラヴィツ一家、に焦点を当てた物語。そのため、ヨゼフとヤンたちの襲撃によって結果的に死亡したハイドリヒ

の人物像については本作では何も描かれず、彼の姿はニュース映像と襲撃された時にピストルで反撃する姿だけだ。

ハイドリヒは若くしてナチ親衛隊のトップであるヒムラーの片腕として能力を発揮していたが、そんな彼がボヘミア・モラヴィア保護領の総督代理に起用されたのは彼の「保護領政策」が高く評価されたためだ。しかして、それはどのようなもの？それは、日本が韓国を併合し、寺内正毅を朝鮮総督として京城に派遣したのと同じようなものだし、抵抗組織をつぶすために報奨金制度を採用したのも日本と同じだ。本作後半ではその報奨金制度がいかによく機能していたかを示すエピソードも登場するのでそれにも注目！

ナチス・ドイツにとって、ボヘミア・モラヴィア保護領の提督代理たるヒムラーが白昼堂々と襲撃されたのは大事件。その犯人は草の根をわけても逮捕しなければ……。そう考えたのは当然。その結果、ヨゼフたちを匿ったと疑われた小さな村は村ごと焼かれてしまったし、現実にヨゼフとヤンを匿っていたモラヴィツ家にも今、捜索の手が……。さらに、ヨゼフと接触していた女性レンカにも捜査の手が……。

本作ラストに向けては、暗殺実行集団だけではなく、そんな民間人たちに対する弾圧のサマが描かれるので、それに注目！これは、暗殺計画に反対していたヴァネックが予言していたとおりの悲劇だが、さてヒムラー暗殺を命令した側のイギリスにあるチェコ亡命政府の幹部たちは、この悲劇をどのように受け止めたの……？

## ■□■教会の立て籠もりは絶望的。しかし、それでも……■□■

ジョン・ウェインが主演した『アラモ』(60年)では、「アラモの砦」に立て籠もった男たちの任務は迫ってくるメキシコの大軍を1日でも長く引き止めることだった。したがって、この時点では「玉砕」という言葉はなかっただろうが、最初から全員死亡(戦死)することは覚悟の上だった。それと同じように、ヨゼフとヤンはバラシュート部隊の隊員と共にレジスタンスに協力している教会の地下に逃げ込んだが、その発見は時間の問題。本作では、モラヴィツ家の一人息子アタ・モラヴェツへの拷問や報奨金目当ての男の裏切りのため、教会はナチス・ドイツの兵に包囲されることに。その結果、本作ラストのクライマックスはこの教会での攻防戦(銃撃戦)になるのでそれに注目！

本作を観ていると、ヨゼフやヤンたちの抵抗の頑強さが目立つが、これは映画なればこそその話で、本当はこんなに華々しく銃弾をぶっ放して多くのドイツ兵を殺傷することはできなかったはず。だって、彼らが持っている銃器や弾丸数は限られていたはずだし、ドイツ兵だってスクリーン上で見るようなバカげた突入はしてこなかったはずだ。本作でも、ドイツ軍は途中から「水攻め作戦」を採用したが、日本でも豊臣秀吉が何度も採用した「水攻め」や「食料攻め」を使えば、ドイツ軍は犠牲を払わずとも教会の中に立て籠もっているヨゼフやヤンたちを容易に退治することができたはずだ。それでは映画として面白くないから、本作のクライマックスは映画用の演出だと理解しつつ、彼らの死の覚悟を決めた

奮闘ぶりとその最後のサマをしっかり確認したい。

2017（平成29）年7月24日記